

稈麦新品種「ハヤジロハダカ」について

桐山 毅・吉富研一・小西猛朗・山下 淳

九州農業試験場

KIRIYAMA, T., YOSHITOMI, K., KONISHI, T., and YAMASHITA, A.
On the New Variety of Naked Barley,
HAYAZIROHADAKA

1958年に本品種の育成を終り、1958年に長崎県、1959年に大分、熊本両県において奨励品種に採用普及されるに至つたので、その育成の経過並びに特性の概要について述べ奨励普及の参考に供する。

なお本品種の育成に従事した職員は藤吉正記、溝口徳三郎、林田進、井手義人、渡辺郁男及び筆者等である。

来歴並びに育成経過

1947(昭21)：交配(白麦8号×佐賀稈1号)

農林省農試九州支場

1948~51：F₁~F₄ 農林省熊本農事改良実験所1952~58：F₅~F₁₁ 九州農業試験場

1951：生産力検定予備試験に供試

1954：生産力検定試験に供試すると共に西海稈7号の系統名を以て種子配布

1958：稈麦農林18号に登録、ハヤジロハダカと命名

特 性 概 要

ハヤジロハダカの熟期は早生稈、ハシリハダカ等の極早生種より3~4日早い早生種で、草状は中間型、稈長は早生稈、ハヤウレハダカより約10cm短く、ハシリハダカ程度の短稈、穂長もハシリハダカ程度で短いが穂数は多い。その他外観的な特徴としては葉色が濃緑で葉巾が広く稈は細い、春播性程度はV

第1表 一般特性

品 種 名	草 性	出 穂 期	成 熟 期	稈 長	穂 長	50 cm 穂 間 数	葉 巾	葉 色	稈 強 の 弱	春 播 性 程 度
ハヤジロハダカ	中	月 日	月 日	cm	cm	本	中	濃	強	V
(比較)早生稈	稍立	4. 7	5. 17	78	5.2	232	広	中	弱	IV
(比較)ハヤウレハダカ	中	4. 4	5. 13	88	5.7	230	広	淡	中	V
(比較)シラヌイハダカ	稍立	4. 6	5. 15	89	6.2	242	中	淡	強	V
(比較)ハシリハダカ	稍立	4. 11	5. 20	79	5.8	261	稍狭	淡	強	V
		4. 7	5. 13	75	5.2	225	中	淡	強	V

備考：昭和28~32年の5カ年平均、但しハシリハダカは昭和31~32年の2カ年平均。

第2表 耐病性その他

項 目	黒銹病	白澁病	赤 徴 病			小 銹 病			縞萎縮病	雲 形 病		枯 熟 れ		耐 濕 性
	九州	九州	鹿屋	宮崎	高知	九州	長崎	山口	愛媛	鳥取	島根	大分	長崎	九州
年 次	昭和26~28	28~32	26	26	28~32	26~30	27~32	30	28~32	30	31~32	29	32	29~31
ハヤジロハダカ	強	中	弱	強	強	中	中~強	強	中~強	稍強	弱	稍強	稍強	中~弱
(比較)早生稈	稍強	稍強	中	中	中	中	中	弱	中~強	弱	弱	中	中	中~弱
(比較)佐賀稈1号	強	弱	稍強	中	中	弱	中~強	一	中	一	一	中	中	中~弱
(比較)ハヤウレハダカ	一	中	一	一	一	一	一	一	中~強	一	一	一	一	一
(参考)赤神	中	弱	稍強	一	強	中	強	一	強	稍弱	弱	稍強	中	一

第 3 表 子実並びに収量成績

品 種 名	標 準 栽 培				反 当 り 子 実 重 比 率				搗 精 歩 合	
	子 実 一 升 重	千 粒 重	品 質	反 当 り 子 実 重	標 準	多 肥	早 播	晩 播	1937	1938
ハヤジロハダカ (比較)早 生 稈	373	27.1	中中	82.4	107	105	116	109	78	71
(比較)ハヤウレハダカ	360	25.5	中下	76.7	100	100	100	100	—	—
(比較)シラヌイハダカ	372	25.9	中上	83.2	110	105	119	107	76	—
(参考)赤 神 力	359	22.5	中中	75.7	99	94	107	103	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	76	69

備考：上記成績は昭和28~32年の5カ年平均で示す、但し早播は昭和31年、晩播は昭和28~30年の3カ年平均を示す。

第 4 表 奨励品種に採用した3県における成績

(イ) 県農試における成績

県 名	品 種 名	成 熟 期	稈 長	穂 長	50cm間 穂 数	反 当 り 子 実 重	品 質
長 崎	ハヤジロハダカ	月 日	cm	cm	本	貫	中中~上 下上~中中 中下~中中
	(比較)長崎早生稈	5. 15	81	5.0	140	67.6	
	(比較)ハシリハダカ	5. 12	86	5.2	121	65.3	
大 分	ハヤジロハダカ	5. 20	78	4.8	102	96.9	中下~中上 中上 中下~中上
	(比較)早 取 稈	5. 17	87	5.4	97	88.1	
	(比較)ハシリハダカ	5. 17	83	5.0	97	90.1	
熊 本	ハヤジロハダカ	5. 19	74	4.7	208	59.9	中下~中上 中下~中上 下中~中中
	(比較)シラヌイハダカ	5. 23	73	5.5	195	53.9	
	(比較)ハシリハダカ	5. 16	75	4.9	194	57.8	

備考：長崎は昭和31~32年、大分は昭和28~32年、熊本は昭和30~32年の平均で示す。

(ロ) 県内試作成績

県 名	項 目	地 帯				計	比 較 品 種 名
		平 川	準平川	中山間	高 冷		
長 崎	増 収 点 数	6	7	4	—	17	長崎早生稈
	減 収 点 数	0	0	0	—	0	
	増 収 点 数	4	3	2	—	9	ハシリハダカ
	減 収 点 数	1	5	2	—	8	
	増 収 点 数	3	2	—	—	5	愛媛稈1号
	源 収 点 数	1	3	—	—	4	
大 分	増 収 点 数	7	3	1	3	14	ハシリハダカ
	減 収 点 数	1	1	0	0	2	
	増 収 点 数	8	3	2	1	14	ハヤウレハダカ
	減 収 点 数	0	1	0	0	1	
熊 本	増 収 点 数	—	—	—	—	16	ハシリハダカ
	減 収 点 数	—	—	—	—	9	
	増 収 点 数	—	—	—	—	17	シラヌイハダカ
	減 収 点 数	—	—	—	—	12	
	増 収 点 数	—	—	—	—	15	早 生 稈
	減 収 点 数	—	—	—	—	8	

備考：上表は夫々の比較品種に対して増(減)収した試作点数を示す。

耐病性に関しては第2表に示すとおり、黒銹病、小銹病及び赤黴病には現在の早生品種に比較して、より強く白濁病には余り強くない。その他の病害については普通程度の耐病性を有する。耐湿性は充分でない。

収量は標準、多肥、早播及び晩播の各栽培様式とも同じ傾向を示しハヤウレハダカと同程度で、早生稈、シラヌイハダカより優る。搗精歩合はハヤウレハダカ及び赤神力に優るとも劣らない。長崎、大分及び熊本の3県においても夫々の早生比較品種の何れよりも多収を示している。

子実の中形大粒で豊円、品質は良好で早生品種中では最上の階級に属する。

適地

以上の成績並びに各県における試作成績（第4表）よりみれば、その適応地域は相当広く、九州中北部の稈麦の主要栽培地域一帯特に平川地帯より中山間地帯にわたる比較的肥沃な水田作並びに畑作に適し、水田作としては早播することにより水稲早期栽培の前作用として利用できる地帯もあり、畑作としては短、強稈性及び早熟性を利用して間、混作用に好適するものと思われる。但し地力瘦薄な畑地、排水不良な水田並びに山間地は避けたほうがよい。又白濁病の多発地帯は危険があるので避けるべきである。

栽培上注意すべき点

1) ハヤジロハダカは穂数型に属する品種なので少

肥栽培又は地力瘦薄な火山灰地は避け、穂数の確保が増収の第一歩となるので或る程度基肥に重点をおいた施肥法が望ましい。2) 白濁病の常発地及び澁田は避ける。3) 早播きすると増収するが、晩播ではその性能を十分に発揮できないので晩播にならぬよう留意する。

結言

ハヤジロハダカはその早熟性、短、強稈性を利用し水田作における多収栽培は勿論のこと、畑作における輪作体系の一部門に巧く組入れることによりその適応範囲は今後益々拡大し、その多収性、良質性の点よりみても現存する早生品種並びに晩生種の一部にも置換つて行くことが期待できる。

（附）命名の由来：早熟で品質が良好である意。